

コラム

コラム1 東京の保護上重要な自然環境の紹介

江戸時代の東京は既に世界有数の大都市であったと言われている。明治時代には郊外ではニホンジカが普通に見られ、ニホンカワウソの目撃記録も確認されている。また、当時の台地部には農地とともに雑木林や水辺など多様な環境が広がり、遠浅の海では昭和期に至るまで潮干狩りができるほど自然が残り、大都市でありながらも持続的に生物多様性が維持されていたと考えられる*。

現在では、特に低地や台地では都市化が面的に進みその多くが失われている。しかしながら、面積も少なく場所も限られるものの、海岸部の干潟や塩性湿地、低地部の池沼や周辺湿地、多摩川水系中流部の低地に広がる水田や用水路、低地と台地の境界にある崖線や湧水、台地に残るいくつかの湧水池などには、当時から残されている自然環境が存在している。一方で、丘陵地や山地では、樹林地の分断縮小化は

みられるものの、当時から引き継がれてきた二次的な自然から奥山の手つかずに近い原生的な環境まで、豊かな自然環境が面的に存在し、これらが現在の東京本土における生物多様性を支える基盤となっている。

また、都心部では計画的に創出された明治神宮の森や、立入や利用が制限され豊かな自然が維持されてきた皇居や国立科学博物館附属自然教育園のような大規模な緑地が存在している。また、近年、葛飾区水元周辺や武蔵野三大湧水池では自然再生の取組が行われ、残された自然と合わせ多様な自然が確保されている。

ここではそのような中から、特に自然的な資質が高く、多くの絶滅危惧種が生息・生育している以下の9つの代表的な場所を紹介する。

*正井泰夫「江戸の町と自然」、平岩末吉「東京にいた動物たちの話」、小原秀雄「東京の哺乳類、沼田誠・小原秀雄編（1982）東京の生物誌、紀伊国屋書店参照

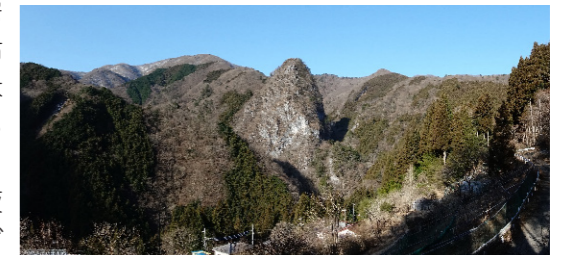


秩父多摩甲斐国立公園（亜高山帯・石灰岩地を含む）

都内の秩父多摩甲斐国立公園の奥多摩エリアは、関東山地の東端の山地帯で、雲取山を頂点として、亜高山帯から山地帯の植生が広がっており、亜高山帯の植生は標高の最も高い雲取山近辺に分布している。また、奥多摩には石灰岩が広く分布しそこには特徴的な植生が見られる。

雲取山や芋ノ木ドッケを中心とした海拔1800m以上の亜高山帯には、コメツガ、シラビソ、トウヒなどからなる亜高山性常緑針葉樹林が広がっている。中でもシラビソやヒメコマツは希少で数個体が確認されているだけである。亜高山帯に生息する鳥類のホシガラスなども生息地は限られている。

石灰岩地は、稲村岩、燕岩、籠岩、梵天岩、白髭の大岩などに点在している。日原にはまとまった石灰岩地が分布し、そこに生育するチチブミネバリやヨコグラノキの低木林は100haと生育面積も比較的広く、立地と種組成からみて、極めて特殊な群落である。クモ類のニッパラマシラグモ、トウキョウホラヒメグモは、鍾乳洞に生息し、石灰岩地に多いツゲに依存するヤヒコカラスヨトウやエイチゴハガタヨトウなども特徴的である。



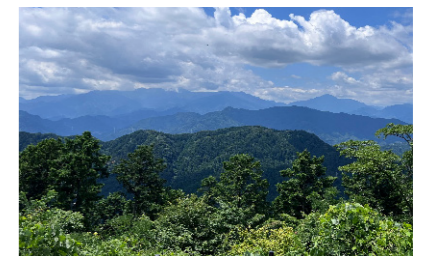
日原集落から鷹ノ巣山と稲村岩を望む（奥多摩町）

高尾山・陣場山地域

明治の森高尾国定公園と都立高尾陣場自然公園に指定された一帯は、海拔600～800mほどの山地で、高尾山、景信山、陣場山などが連なっている。高尾山は都心から約50kmという大都市近郊にありながら自然豊かな天然林が残されており、世界的にも評価されている。また、陣場山は、周辺集落の共有地としてかつては山焼きによりススキ草が維持されていた場所で、現在でも一部その面影が残されている。

高尾山は、奈良時代から高尾山薬王院有喜寺の社領として信仰ともに長きにわたり守られてきた。そのため、周辺を含め約1600種もの植物が確認され、多くの希少な動植物が生息・生育する場所として広く知られ親しまれている。タカオスミレ、タカオヒゴタイ、タカオホロシなど高尾の名を冠する植物も生育する。動物では、貝類のオオギセルの生息地が残存するほか、オオコウラナメクジの唯一の記録地でもある。

陣場山は、山頂付近には草原環境が残されており、そうした環境に依存するカセンソウ、ヒキオコシ、コオニユリ、バアソブ、セイタカトウヒレン、タカオヒゴタイなどが生育する重要な場所でもある。動物では、昆虫類のハヤシドリシジミ、クモ類のシノビグモなどの限られた記録地となっている。



高尾山からの眺望（八王子市）

多摩地域の丘陵地の谷戸群

多摩地域の丘陵地には、浅い谷が枝分かれして入り込み、谷底部に平坦な土地を持つ「谷戸」と呼ばれる複雑な地形が形成されている。谷戸の尾根から谷にかけての斜面には、かつて薪炭林として活用されてきた雑木林等が広がり、谷底部の湿地に湧水を涵養している。湿地は「谷戸田」と呼ばれる小規模な区画の水田として利用され、きめ細やかな農的管理が日常的に行われてきた。このように自然資源を活用しながら、人が適度に手をかけ維持してきた谷戸には、樹林、草地、湿地、ため池、水路等の多様な環境要素がモザイク状に配置され、それらが多様な野生生物の生息・生育環境となっている。

東京都の丘陵地には、約400カ所の谷戸が存在しており、2000年頃から約10年ごとに谷戸調査が行われてきた。一部は都の保全地域や都市公園などにより保全されてきたが、既に開発等により消失した谷戸や、開発の危機に直面している谷戸も多い。東京の保護上重要な自然環境の一つでもある谷戸環境は、緑地保全制度の活用等による生息地保全や、適切な手入れによる維持管理が多様な主体により持続的に行われていくことが望まれている。



多摩丘陵の谷戸（町田市）

多摩川水系中流部低地の水田及び用水路群

東京には、区部のほかに多摩川沿いにも低地が広がっている。そこでは崖線下からの湧水などを利用した稲作が古くから行われていたが、江戸時代以降、多摩川水系からの用水が整備されると、広い範囲で稲作が盛んに行われるようになった。

現在では市街化により水田は減少しているが、多摩川中流部の府中付近から羽村周辺、支流である浅川の日野、八王子周辺には、都内では戦後に激減した水田環境が用水路とともに残されている。それら水田や用水路には、水田生態系を構成する多様な野生動植物が生息・生育しており、都内の保護上重要な自然環境となっている。

特に水生昆虫類や両生類、淡水魚、水草類などにおいて重要な場所であり、水田と水路、背景の樹林地などの環境要素やそれらの組み合わせが多様な生物相を育てている。



秋川沿い低地に広がる水田環境（八王子市）

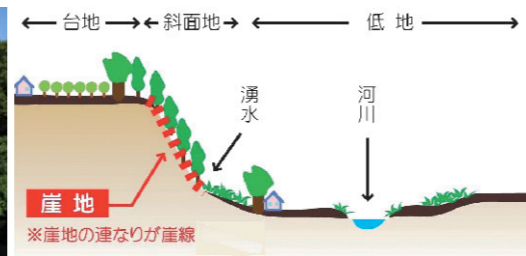
台地の崖線と湧水群

東京都本土部は、西から山地、丘陵地、台地、低地と多様な地形が連なり、中央部には武蔵野台地が広がっている。また、台地と低地との境界には、多摩川などの河川や海の浸食作用でできた「崖線」と呼ばれる崖地が線状に連なっている。崖線は大小約40ヶ所、延長約230kmに及び、その約4割が緑でおおわれ、湧水がみられる場所もある。台地と低地のほとんどは市街化が進み自然環境に乏しい中、崖線には自然度の比較的高い森林植生や水辺などの多様な自然環境が残されている。そのことから崖線は、多くの生物の生息・生育地として機能しており、都市域に生息・生育する野生動植物にとって貴重な自然環境となっている。

崖線の緑地は、一部は様々な緑地保全制度により保全されているが、民有地も多く、多種多様な関係者の協働のもと保全活動を促進していくことが重要である。



多摩川由来の立川崖線（立川市）



崖線の断面図

水元周辺の池沼及び湿地

東京都と埼玉県の境となる葛飾区水元一帯に広がる小合溜^{こあいだめ}周辺は、かつては水田地帯で池沼や湿地が多く、「東京の水郷地帯」と呼ばれるほど、低地の氾濫原湿地の環境が広がっていた。戦後の都市化に伴い湿地環境は激減したが、その一部は都市公園として残され、また、東京都水産試験場内には都内で唯一オニバスの自生池が維持されてきた。

近年、水産試験場が廃止され、かつての水郷環境の一部を都立水元公園の一部として再生する取組が行われ、引き継がれてきた希少な生物相を保全するとともに、自然再生の整備が行われた。その結果、写真のように湿地環境が再生され、タコノアシやヌマトラノオなど地上植生から失われていた水生植物なども復活し、地元のボランティア団体による保全活動等が活発に行われている。



水産試験場跡地における湿地の再生（葛飾区）

武蔵野三大湧水池（三宝寺池・善福寺池・井の頭池）

東京の武蔵野台地の海拔約50mの南北線上にあり、かつて豊かな湧水に涵養されていた自然の池である三宝寺池、善福寺池、井の頭池は武蔵野三大湧水池と呼ばれていた。かつては、氷河期遺存種であるミツガシワやムサシトミヨ、湧水に依存するグンバイトンボなど、冷涼で豊富な湧水に依存する特異かつ多様な生物相がみられた。しかし、周辺の市街地化や地下水の汲み上げ等により1960年代に湧水が枯渇し、現在では多くが井戸からの揚水でまかなわれている状況となった結果、湧水等の水辺に依存する生物相の大幅な劣化消失が確認された。それに対して近年では、土地が保有するポテンシャルを活かした自然環境の保全や再生の取組みが行われている。後述のコラム2における井の頭池のかいぼりによる取組みもその一つである。

三宝寺池では、中の島の沼沢植物群落が昭和11（1939）年に国の天然記念物に指定され、3つの池の中で最も良く湿生生物が保護されてきた。しかし湧水の枯渇などの影響は大きく、カキツバタ、ミツガシワなど消滅の危機にあった植物の保全や、消失した植物の再生に向けた取組みが昭和63（1978）年から実施され、現在も継続されている。その結果、かつて池畔に広がっていたカキツバタ群落写真にあるように再生し、ヒメミクリ、ミズオトギリなどのかつて消失した植物が再生している。



三宝寺池中の島に再生されたカキツバタ群落（練馬区）

都心部の大規模緑地（皇居・明治神宮・自然教育園）

東京の都心部には、江戸時代から引き継がれた江戸城や大名屋敷を起源とする大規模緑地が点在する。特に皇居と自然教育園は、人の立ち入りが制限されていることもあり、良好な自然環境が維持されている。明治神宮の森は、大正時代に明治天皇と昭憲皇太后を主祭神として神宮創建に伴い造営された森である。これらの緑地は100年以上の長い時間をかけて維持されてきたことから、当時の生物相の一部を引き継ぎ残してきたと考えられ、多様な生物相が生息・生育する貴重な場所といえる。また、都心域における生物多様性の維持、周辺への種の供給源となるコア緑地としての価値も大きい。

皇居と自然教育園では国立科学博物館、明治神宮では各分類群の専門家からなる調査団によって、詳細な生物相調査が行われている。



明治神宮の森（渋谷区）

東京都内湾の干潟と塩性湿地群

古代の海岸線は現在よりかなり内陸側であったが、江戸時代以降に河川改修や干拓、埋立などが徐々に進み、特に戦後、土地の大規模な人工改変が行われている。

江戸時代から明治時代ころまでの東京都内湾は、遠浅の海で干潟や塩性湿地など特徴的な水辺環境が広がっていた。しかし、現在、それらは多摩川や荒川、江戸川の河口域などにわずかに残るのみとなっている。

この結果、干潟や塩性湿地の環境に依存する多くの野生動植物などが絶滅種や絶滅危惧種に選定されている。

近年、葛西海浜公園内に人工の干潟が再生されたことにより、再び生息・生育が確認されている種もあり、こうした干潟や塩性湿地環境の保全や再生が東京の生物多様性を維持向上させる上で重要となっている。



多摩川六郷の干潟とヨシ原（大田区）
出典：大田区自然観察路「川と干潟のみち」の生物と植生（2019年3月大田区）

コラム 2 保護上重要な野生生物種の保全・再生事例の紹介

コラム 1 で紹介している東京の保護上重要な自然環境を有するエリアは、多くのレッドリスト掲載種やそれらを支える多様な野生生物が生息・生育する拠点となっている。そうした拠点のみならず、周辺の小規模な緑地なども多様な生きものの生息・生育地として機能し互いにネットワークを形成していくことが、本土部全体における生物多様性の確保につながっていく。そのためには、エリア毎にそれぞれの現状を把握しながら順応的に保全活動に取り組み、さらには自然環境を再生していく取組みが重要となる。野生生物種が自生している場所で保全や再生を行うことを「生息域内保全」といい、これに対して、現状の自生地だけでは保全や再生が間に合わなくなる可能性がある場合などに、自生地の外の安全な施設に対象種を保護し、それらを増やすことにより絶滅を回避する方法を「生息域外保全」という。

ここでは、都内における保護上重要な野生生物種の保全や再生に向けた7つの取組事例を紹介する。1 及び7 の事例は「生息域外保全」を中心とした取組であり、2 から6 は「生息域内保全」を中心とした取組みである。いずれも複数の保全手法などを組み合わせながら取組みを進めている。

1. 皇居お濠に眠る埋土種子による水草の再生（都心の再開発ビルを活用した保全事例）
2. 東京都内湾における葛西海浜公園の人工干潟による干潟環境の再生
3. 多摩川中流域の丸石河原におけるカワラノギクの保全
4. 武蔵野台地の公園池における、かいぼりを契機とした水辺の自然再生（井の頭恩賜公園）
5. 谷戸における伝統知に基づく里山環境の保全・再生（図師小野路歴史環境保全地域）
6. トウキョウサンショウウオ生息地における侵略的外来種対策
7. 都立神代植物公園植物多様性センターにおける希少植物保全の取組み

1. 皇居お濠に眠る埋土種子による水草の再生（都心の再開発ビルを活用した保全事例）

かつて東京の東部低地には池沼や湿地、水田が広がり、そこには多様な水草が生育していた。戦後の高度成長期以降の急速な市街化の進行により湿地環境は失われ、多くの水草は絶滅及び絶滅危惧種となった。

江戸時代から維持されている皇居のお濠にはそのような水草の埋土種子（散布体）が眠っている可能性が高く、それらを含む泥から、近隣の再開発地で整備された修景施設の水域を利用して水草の再生を試みた。具体的には、お濠（大手濠）から道路を挟んだ東側の再開発地（大手町パークビルディング）で、外構部の修景施設の池や流れの形状などを、設計段階で水草を再生しやすいように調整し整備を進めた。お濠から採取した泥をバットに薄く撒き出し水路に沈め、埋土種子から水草を発芽させ、それを池や流れに移植し、ビルの屋上でもコンテナで水草を育成すると共に管理やモニタリング調査などを継続している。

その結果、再生した水草は藻類も含めて11種であり、クロモ、コウガイモ、エビモ、ツツイトモ、ホザキノフサモなど複数の絶滅危惧種の再生が認められ、いずれの種も生育が維持されている。この取組みは、三菱地所、環境省、日本自然保護協会が連携し、学識者の助言のもと、大丸有エリアの企業が参加する「濠プロジェクト」の活動として行われている。お濠の泥の採取など、オフィスワーカーや一般市民が参加するイベントも実施しており普及啓発活動も積極的に行っている。



お濠から採取した泥から水草を再生する実験

再生した水草、左からコウガイモ、クロモ、ホザキノフサモ

2. 東京都内湾における葛西海浜公園の人工干潟による干潟環境の再生

葛西海浜公園は、先駆的な自然再生事業として江戸川と荒川2つの河川が流入する汽水域に形成された人工干潟である。干潟には東西2か所の人工なぎさがある。東側は人の立ち入りを制限し自然状態での干潟環境の復元を目指す「東なぎさ」、西側は人が立ち入って楽しむことができる「西なぎさ」に分かれている。東なぎさおよび西なぎさにおいては自然環境に関するモニタリング調査が継続して行われている。

スズガモやカンムリカイツブリをはじめとする水鳥などの生息地として、国際的にも重要であることから、水鳥を食物連鎖の頂点とする湿地の生態系を守ることを目的としたラムサール条約湿地に東京都で初めて登録された（平成30年）。

東なぎさは、人の影響を受けない本来の自然環境のポテンシャルを示しており、泥干潟ではトビハゼ（区部：絶滅危惧ⅠA類）が生息し、天然のアサクサノリ（区部：絶滅危惧Ⅰ類）が確認されているほか、塩性湿地はウラギク（区部：絶滅危惧ⅠB類）の生育地にもなっている。西なぎさは、養浜により砂浜が維持されており、砂浜ではコアシサシ（区部：絶滅危惧ⅠB類）の営巣も確認されている。



ラムサール条約湿地に登録されている葛西海浜公園と東なぎさの塩性湿地（江戸川区）

3. 多摩川中流域の丸石河原におけるカワラノギクの保全

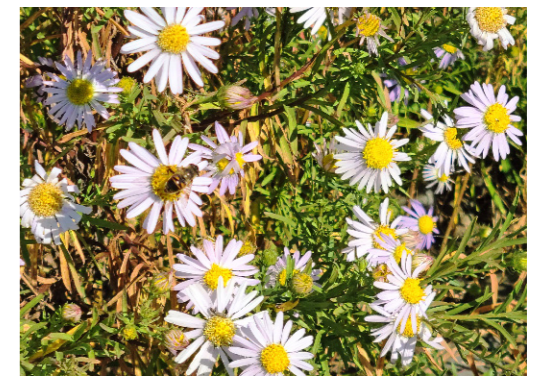
倉本宣

かつて、多摩川の中流域では、秋遅く、大輪の野菊の花が雲のように咲いたといわれる。そのカワラノギクは2019年10月の洪水で、多摩川から野生の個体群が絶滅し、人為的に再生された個体群のみになっている。1989年のレッドデータブックの刊行を前に、絶滅危惧種の例としてカワラノギクの種子期の生態、成長、開花とポリネーター、種子散布と種子を食べる昆虫ツツミノガ属の一種、遺伝子レベルの多様性などの研究が行われ、工事の影響を受ける個体群の種子を使って新しい個体群を作る試みが行われた。規模が小さいと周囲のイネ科の高茎草本が広がったり、小さな増水で流失したりしてうまくいかないことがわかった。

そこで、2002年に河川生態学術研究会多摩川グループによる中流域の河原を復元する事業の一環として、多摩川永田地区（福生市）に大規模な礫河原を造成し、カワラノギクの播種に始まる管理をカワラノギクプロジェクトとして市民、河川管理者、地元自治体、研究者の協働によって行うことにした。2007年の増水では地盤の高い位置のカワラノギクが生き残って個体群を回復したものの、2019年の大増水で生き残ったのはまもなく枯死する個体のみであったので、再生個体群は絶滅し、再び播種からスタートすることになった。

花粉を運ぶハナアブ類はカワラノギクの小規模な個体群には訪れない。ツツミノガ属の一種はカワラノギクの種子期に結実した頭花に逆立ちして着いているミノムシであるものの2019年以降見られなくなっている。カワラノギクは多摩川の生態系の一員としての機能を失ってしまったのかもしれない。

カワラノギクの研究者は延べ12名、多摩川における保全・再生団体は延べ10団体にのぼる。カワラノギクは乾燥した肥料分の少ない礫河原の植物であり、作物や園芸植物とはまったく異なる自然選択を受けてきた。カワラノギクの生育地である礫河原がよみがえるまで、カワラノギクをめぐる綱渡りのような保全・再生を続けながら、野生の植物としての遺伝的な多様性を守っていかなくてはならない。



カワラノギクとポリネーター

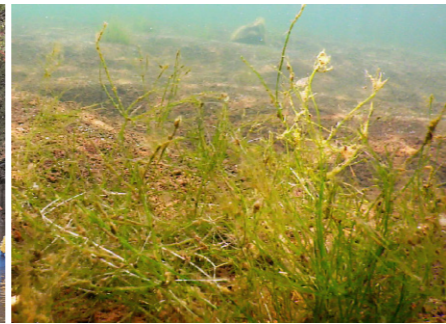
4. 武蔵野台地の公園池における、かいぼりを契機とした水辺の自然再生(井の頭恩賜公園)

都立井の頭恩賜公園の井の頭池は、神田川の源流にあたる面積約 4.2ha の自然の池で、かつて湧水が豊富であったころは、水草、淡水魚類、トンボ類など多様な水辺の生きものの生息地であった。1960 年代に入ると湧水量は減り続け、枯渇や水質悪化が常態化し、池の生物相や生態系は大きく変化した。さらに 1980 年代には、人の手により持ち込まれたオオクチバスやブルーギル、アカミミガメなどの侵略的外来種により在来の生態系は大きく影響を受け、それらは社会問題として取り上げられるようになった。

そうした中、公園開園 100 年を契機に、地域や市民、行政が一丸となり、「よみがえれ!! 井の頭池!」のスローガンのもと、池の生態系の回復や水質改善を目標に掲げ、平成 26 年から 30 年にかけて 3 回のかいぼりを市民協働で行った。主な成果として「水質改善」、「水草の復活」、「在来種の回復」、「カツブリ等水鳥の繁殖増加」などが挙げられ、水草類では、59 年ぶりにイノカシラフラスコモ（本土部：絶滅危惧Ⅰ類）が確認されたほか、ツツイトモ（北多摩：絶滅危惧ⅠB類）、ヒロハノエビモ（北多摩：野生絶滅）など未記録の種が確認された。昆虫類ではアオイトトンボ（多摩部：絶滅危惧Ⅱ類）などが確認されている。かいぼり後も水辺の自然再生に向けた活動として、アメリカザリガニなどの外来種駆除や水生生物や水鳥、トンボ類のモニタリング調査、来園者への普及啓発、かいぼり時に池の汀線沿いに造られた湿地帯の植生管理などが、市民ボランティア「井の頭かいぼり隊」等の協力により精力的に続けられている。



市民協働で行われたかいぼり



復活した池底のイノカシラフラスコモ

引用文献：内山香（2017）「かいぼりで目指す、井の頭池の自然再生」、『水循環 貯留と浸透』2017 vol.105

5. 谷戸における伝統知に基づく里山環境の保全・再生（図師小野路歴史環境保全地域）

「東京における自然の保護と回復に関する条例」に基づく図師小野路歴史環境保全地域は、いくつもの枝分かれした谷戸を有する複雑な地形の中に、樹林、草地、水田、湿地、ため池、土水路がモザイク状に配置された多摩丘陵の原風景ともいえる里山景観を有し、絶滅危惧種をはじめとした多様な野生生物の生息地となっている。また、アズマギク等をはじめとした都内絶滅種の最後の生育地となるなど、保護上重要な里山環境と言える。これらは、地形や地質等が持つポテンシャルの高さのみならず、それらを活かしながら地域の慣習等に基づき、暮らしに必要な自然資源を得るために共同管理してきた「入会（いりあい）」の考えの下、弛まぬ手入れが続けられてきたことにも由来している。

ここでは、1992 年に結成された地元農家からなる「町田歴環管理組合」が中心となり、地域に受け継がれてきた伝統的農業手法による谷戸の保全管理を実践し、長く耕作放棄され雑木や竹類で覆われ荒地となっていた谷戸田の再生等に取り組んできた。再生した谷戸田では昔からの農事のサイクルを続けることで多様な生物の生息環境を確保してきた。具体的には、入会の考えのもと、農道、土手、水路、畦畔等の環境区分を明確にし、機能を復元し、①生物の多様性を確保する、②良好な谷戸景観を保全する、③上流域の治水の保全に重点を置いた管理を行うことを方針とした植生管理が行われている。また、多数の研究者による研究活動も数多く行われ、得られた科学的なデータもこうした活動を下支えしている。



伝統知に基づく手入れが行われてきた里山景観



斜面脇の小規模な谷戸田の手入れ

引用文献：内山香（2022）、伝統的な谷戸管理手法により育まれた多摩の里山の水辺、水環境学会誌 Vol.45

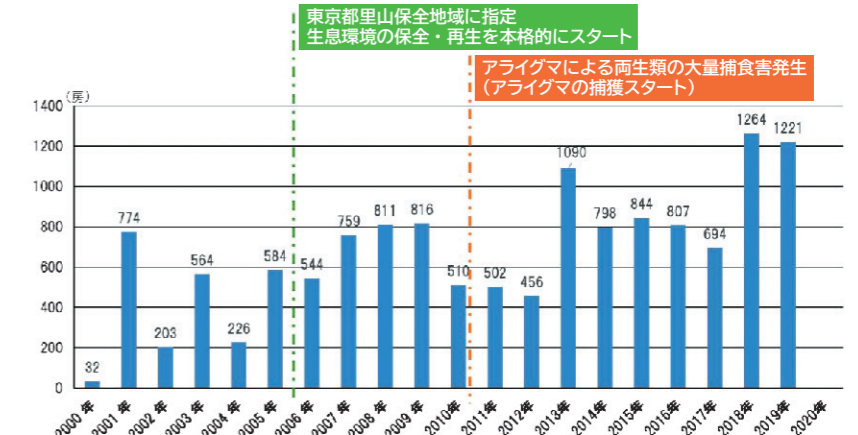
6. トウキョウサンショウウオ生息地における侵略的外来種対策

トウキョウサンショウウオは、雑木林と隣接する水辺を歩き来して生息することから、東京都西部では里山の良好な自然環境を象徴する存在とされ、長年に渡り生態や分布調査が行われてきた。1998 年以降 10 年おきに大規模調査が行われ、絶滅の危険性があることが明らかになってきた。その原因は開発に伴う生息地の消滅などがあるが、全ては把握されていない。しかし近年アライグマの捕食による影響が指摘されている。

「東京における自然の保護と回復に関する条例」に基づく横沢入里山保全地域では、全域が野生動物保護地区に指定され、トウキョウサンショウウオ（西多摩：絶滅危惧ⅠB類）は指定種として保護対象種となっている。また、市民団体や研究者による保全活動が継続的に行われており、卵嚢数は増加していたが、2010 年にアライグマによるものと考えられる両生類の大規模な食害が発生し、卵嚢の確認数が減少した。この対策として、行政によるアライグマの捕獲と市民団体による産卵場や湿地の保全管理活動とがセットで行われ、再び卵嚢数が増加する傾向が見られている。

一方で周辺地域からのアライグマの侵入を防ぐことは困難であることから、広域的な視点での駆除活動が必要となっている。

また、本種の減少要因としては、人による販売飼育目的の卵嚢の採集や生息地の湿地の乾燥化による繁殖場の減少なども指摘されている。



横沢入地域における確認卵のう数の経年変化とアライグマの駆除
出典：あきるの市横沢入地区におけるトウキョウサンショウウオの現況、佐久間聡
トウキョウサンショウウオ：長期調査で分かった個体群の衰退と絶滅、草野他（2022）

7. 都立神代植物公園植物多様性センターにおける希少植物保全の取組み

都立神代植物公園植物多様性センターは、都内における植物多様性保全をより一層推進するため、保全上の様々な機能を総合的に担う拠点施設となることを目的に、平成 24 年 4 月に開設された。

植物多様性センターの事業は、次の 3 つを主体として様々な活動を展開している。

1. 絶滅危惧植物の保護・増殖
2. 絶滅危惧植物に関する情報収集・発信
3. 植物多様性に関する教育・普及

絶滅危惧植物の保護・増殖については、植物多様性センターが重点的に保全する植物種を「優先保全対象種」として 118 種（本土部 43 種及び島しょ部 75 種）選定し、それら植物種の現地での生育環境調査等の生息域内保全や、他の公園や植物園などと連携した種子の採取や保存、ラン科植物の無菌培養による増殖などの生息域外保全を行っている。

絶滅危惧植物に関する情報収集・発信については、他の植物園や大学、地元保護団体等とのネットワークの構築や、絶滅危惧植物保全データベースによるデータの集積、保全団体と意見交換・情報共有を行う情報連絡会を開催・運営している。

植物多様性に関する教育・普及については、情報館での展示や講座、環境学習プログラムを開催し、植物の魅力や多様な生き残り戦略など、植物多様性保全の重要性を発信している。



現地モニタリング調査



館内の様子

コラム3 東京にゆかりのある希少な野生生物種の紹介

本土部レッドリスト 2020 見直し版掲載種の中から、和名や学名に「東京」や「江戸」、「都内の地名」などを冠する種、発見や種の記載などの過程で東京都に関わりのある種など、東京に何らかのゆかりがある希少な野生生物を紹介する。

これらの中には、東京都がタイプ産地*として記載された種、タイプ産地ではないが東京で採集された標本をもとに記載された種なども含まれている。

動物で 16 種、植物と藻類で 18 種掲載した。

*）タイプ産地：基準標本が採集された場所

下線：和名に含まれる東京の地名等に関する表記 ★：タイプ産地が都内の種

東京都本土部：「本土部レッドリスト 2020 見直し版」のカテゴリ

環境省：「環境省レッドリスト 2020 年版」のカテゴリ



ヤマコウモリ ★

ヒナコウモリ科

Nyctalus aviator

東京都本土部 **VU** 環境省 **VU**

1911年に東京をタイプ産地として記載された種で、東京都本土部では最大のコウモリ。1930年代まで区部、1960年代まで南多摩でも見つかっていたが、2000年以降、西多摩の既知のねぐら木が伐採され失われた。



ニセトックリゴミムシ ★

オサムシ科

Oodes tokyoensis

東京都本土部 **NT** 環境省 **-**

1954年に東京都練馬区石神井をタイプ産地として記載された。



ムサシトミヨ

トゲウオ科

Pungitius sp.

東京都本土部 **EX** 環境省 **CR**

1963年に中村守純博士によって東京都と埼玉県からのみ採集された種として埼玉県熊谷産の個体写真の紹介とともに「ムサシトミヨ」の和名が提唱された。トミヨ属魚類は分類学的な混乱が長く続いており、本種の学名は未だ定まっていない。



ムサシノジュズカケハゼ ★

ハゼ科

Gymnogobius sp. "Kanto-endemic species"

東京都本土部 **EN** 環境省 **EN**

那珂川・利根川・荒川・多摩川の4水系の中流域にのみ生息する関東固有種として、2013年に明仁らによって生物学御研究所に登録されている東京都あきる野市多摩川産の標本に基づく全形図とともに「ムサシノジュズカケハゼ」の和名が提唱された。学名は未だ定まっていない。



オオセッカ ★

センニュウ科

Locustella pryeri

東京都本土部 **CR** 環境省 **EN**

1884年に東京をタイプ産地として記載された。



ヒガシニホントカゲ ★

トカゲ科

Plestiodon finitimus

東京都本土部 **VU** 環境省 **-**

2012年に東京都大田区池上（池上本門寺）をタイプ産地とし、ニホントカゲとは別種として記載された。



トウキョウサンショウウオ ★

サンショウウオ科

Hynobius tokyoensis

東京都本土部 **EN** 環境省 **VU**

1931年に東京都西多摩郡多西村（現あきる野市）をタイプ産地として記載された。



タカオキリガ ★

ヤガ科

Pseudopanolis takao

東京都本土部 **EN** 環境省 **-**

1927年に東京都高尾山で発見され、新属新種として発表された。



ニホンスナモグリ ★

スナモグリ科

Neotrypaea japonica

東京都本土部 **DD** 環境省 **-**

1891年に東京湾をタイプ産地として *Callinassa subterranea* var. *japonica* の名で記載された。後に、「変種」から「種」に昇格されたが、属名は *Nihonotrypaea* に変更され、さらに現在は *Neotrypaea* とされている。



キシノウエトタテグモ ★

トタテグモ科

Latouchia typica

東京都本土部 **NT** 環境省 **NT**

1913年に東京都文京区東京大学構内をタイプ産地として記載された。



トウキョウダルマガエル

アカガエル科

Pelophylax porosus porosus

東京都本土部 **EN** 環境省 **NT**

タイプ産地は神奈川県であり、名前の理由は分類の経緯から多数推察されるところである。トウキョウの名がついていることで、東京の水辺を考えるきっかけとなっている。



グンバイトンボ ★

モノサシトンボ科

Platycnemis sasakii

東京都本土部 **EX** 環境省 **NT**

1882年に現在の井の頭恩賜公園で発見され、1949年に亜種として記載。分類の再検討により2021年に独立種となった。



トウキョウトラカミキリ ★

カミキリムシ科

Chlorophorus yedoensis

東京都本土部 **EN** 環境省 **-**

1929年に東京都足立区をタイプ産地として記載された。



ニッパラムシラグモ ★

マシラグモ科

Masirana nippara

東京都本土部 **VU** 環境省 **-**

1957年に東京都奥多摩町日原の洞窟をタイプ産地として記載された。



トウキョウヒラマキ ★

ヒラマキガイ科

Gyraulus tokyoensis

東京都本土部 **CR+EN** 環境省 **DD**

1938年東京都宮城前（現在の皇居前広場）楠公銅像前小池をタイプ産地として記載された。この池は、今はない。



トウキョウコオオベソマイマイ ★

ナンバンマイマイ科

Aegista tokyoensis

東京都本土部 **NT** 環境省 **NT**

1980年に東京都文京区小石川植物園をタイプ産地として記載された。



オクヤマシダ
チャセンシダ科

Asplenium pseudowilfordii

東京都本土部 CR 環境省 VU

アオガネシダモドキとして、1938年に田川基二博士により、遠江国香山村（現静岡県磐田郡山香村）で採集された標本に基づき、発表された。



イワハリガネワラビ ★
ヒメシダ科

Thelypteris musashiensis

東京都本土部 VU 環境省 -

1948年に奥多摩町の棒ノ折山で採集された標本に基づき、1951年に檜山庫三氏により発表された。



タカオシケチシダ ★
メシダ科

Athyrium decurrentialatum f. *platyphyllum*

東京都本土部 VU 環境省 -

高尾山で採集された標本に基づき、1930年に中井猛之進博士により発表された。当時の学名は、*Cornopteris musashiensis* Nakai で、種小名に「武蔵」が付けられていた。



ハナムグラ ★
アカネ科

Galium tokyoense

東京都本土部 EX 環境省 VU

種小名 *tokyoense* は、「東京産の」の意味で、牧野富太郎博士が東京府南葛飾郡小岩村などで採集した標本をタイプとして、1903年に記載発表された。



タカオホロシ ★
ナス科

Solanum japonense var. *takaoyamense*

東京都本土部 EN 環境省 -

牧野富太郎博士が高尾山で採集し、1926年に新種として発表した。後に原寛博士によりヤマホロシの変種と学名が改められた。



タカオヒゴタイ ★
キク科

Saussurea sinuatoides

東京都本土部 NT 環境省 -

和名タカオヒゴタイは、「高尾平江帯」の意で、タイプ標本の採集地は高尾山である。中井猛之進博士により1909年に命名された。



ヤマクラマゴケ ★
イワヒバ科

Selaginella tamamontana

東京都本土部 VU 環境省 -

1977年に奥多摩町日原で採集された標本に基づき、1978年に芹沢俊介博士が発表した。



アズマツメクサ ★
ベンケイソウ科

Tillaea aquatica

東京都本土部 EN 環境省 NT

明治中期に植物学者の池野成一郎博士と牧野富太郎博士により、杉並区の大宮八幡宮周辺の田んぼで発見された。



アズマシライトソウ ★
シロソウ科

Chionographis hisauchiana

東京都本土部 CR 環境省 VU

1951年に佐藤達夫氏により霞村（現青梅市）で採集され、1952年に奥山春季博士により、シライトソウの関東地方の型として発表された。



ハチオウジアザミ ★
キク科

Cirsium tamastoloniferum

東京都本土部 EN 環境省 -

2003年に内野秀重氏により八王子宇津貫町で発見されたアザミで、2012年に国立科学博物館の門田裕一博士が新種として発表した。

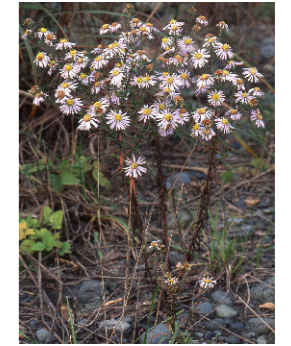


カワラニガナ ★
キク科

Ixeris tamagawaensis

東京都本土部 VU 環境省 NT

種小名 *tamagawaensis* は多摩川に由来する。牧野富太郎博士により、1892年に発表された。



カワラノギク ★
キク科

Aster kantoensis

東京都本土部 EN 環境省 VU

1927年に立川市内の河原で発見され、北村四郎博士により学名がつけられた。種小名 *kantoensis* は、関東地方の河川の中流域に生育することから名前がつけられた。



タマノカンアオイ
ウマノスズクサ科

Asarum tamaense

東京都本土部 EN 環境省 VU

和名タマノカンアオイは、「多摩の寒葵」の意で、産地の多摩丘陵に基づく。また、種小名 *tamaense* は、「多摩産の」の意味。タイプ産地は登戸村（現川崎市登戸）であり、1931年に採集された標本に基づいて、牧野富太郎博士が命名した。

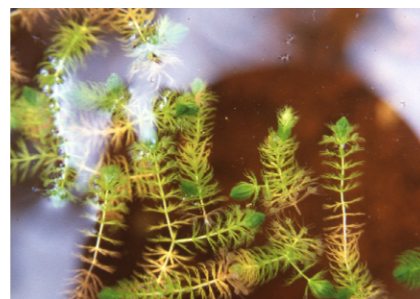


タマノホシザクラ ★
バラ科

Cerasus tamaclivorum

東京都本土部 CR 環境省 CR

2003年に大原隆明氏らが新種の桜を発見し、2004年にホシザクラと命名し発表した。その後、栽培品種との混乱を避けるために和名の変更が提案され、タマノホシザクラと命名された。



ムジナモ ★
モウセンゴケ科

Aldrovanda vesiculosa

東京都本土部 EX 環境省 CR

1890年に江戸川区北小岩四丁目先の江戸川河川敷の用水池で、牧野富太郎博士により発見された。発見地の小岩菖蒲園には、ムジナモ発見の記念碑がある。現在、ムジナモは野生では絶滅している。



カンエンガヤツリ ★
カヤツリグサ科

Cyperus exaltatus var. *iwasakii*

東京都本土部 VU 環境省 VU

上野の不忍池で採集された標本に基づいて、牧野富太郎博士が1903年に新種として発表した。

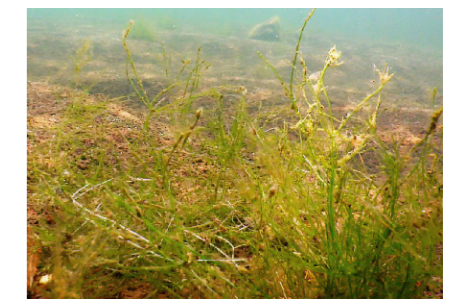


シムランジン
セリ科

Pterygopleurum neurophyllum

東京都本土部 EX 環境省 VU

和名は、東京都板橋区志村の湿地に多く生えていた事による。



イノカシラフラスコモ ★
藻類

Nitella mirabilis var. *inokasiraensis*

東京都本土部 CR+EN 環境省 CR+EN

1957年に東京都三鷹市の井の頭公園の池および神田川上流部で発見され、1965年に新種として発表された。その後、確認されなくなったが、井の頭池でのかいぼりにより、2016年に復活が確認された。

下線：和名に含まれる東京都本土部の地名表記 ★：タイプ産地が都内の種

写真提供者

以下の方々から写真を提供していただいた。お名前をあげて心より感謝の意を表したい。

(五十音順、敬称略)

〈個人〉

畔上能力、内野秀重、内山香、大沢夕志、大塚勇哉、奥田重俊、小野展嗣、金澤光、草野保、倉本宣、源河正明、新海栄一、趙賢一、丹羽和仁、藤井良造、御手洗望、三間久豊、飯森政宏、宮崎佑介、山崎文晶

〈団体・専門機関等〉

NPO 法人生態工房、NPO 法人 NPOBirth、(株)愛植物設計事務所、神代植物公園植物多様性センター
東京都環境局、東京都港湾局、東京都西部公園緑地事務所、東京都東部公園緑地事務所、(有)ゼフィルス